

学校教育における教師の教育愛と人間愛の今日的課題

－若い教師に伝えたいこと－

小島 富司^{*1} 滝沢 利直^{*2}

The Contemporary Subject of Teacher's Love for Education and Humanity at School

－A Message for Young Teachers－

Tomiji Kojima^{*1} Toshinao Takizawa^{*2}

Teachers should always have the followings in their mind. 1) Teachers should have sense of responsibility and a sense of mission in education. 2) Teachers should be interested in children and young people. 3) Teachers should have social skills, such as maintaining interpersonal relationship. 4) Teachers should brush up their communication skills, with large perspectives, flexible mind and intelligence. 5) Teachers should have skills for expressing their ideas. 6) Teachers should always cooperate each other and should maintain liaison at workplace, because teachers network should be constructed. 7) Teachers should have power over society. These include concerns from school to a community, and social participation activities.

はじめに

長い小学校教育の学校現場の体験を通して、たった一度だけその学校に所属する全教職員が一人一原稿を書き上げて、一冊の研究実践記録集を創り上げたことがある。日々の教育の営みの中で、子どもたちの「授業づくりや仲間づくり」を実践し感じてきたありのままの記録をまとめることにより、教職員集団の力を高めたいという願いを込めたのである。地域社会や保護者からの学校への期待感を始め、学校教育及び子どもたち自身が抱える教育課題が増す中で、一人一人の教師の力を高めることが必要であるし、また従来の研究紀要が硬いイメージで教師の思いを語り切れていなかったことがその創り上げの理由であった。学校全体として教育実践に力を込めた証のような、一人一人の子どもの生き生きとした姿を真摯に追い求めた教職員集団の熱い心を表現したい、という編集委員の熱意によりやがて一冊の読み物「百合の樹の下で」ができあがったのだ。

全教職員から寄せられた実践記録は、どれをとっても子どもたちの方を向いた教師の喜びであった

り苦しみであったり、また教師の思いと願いが表現された原稿であった。小学校の教師であるからには、当然授業づくりの実践例であったり、学級経営や児童生徒指導の内容であったり、また立場を変えて学校運営的に全体を見据えての取り組み等が多彩に語られていた。編集の重要なポイントは、実践記録の単なる羅列ではなく手に取り読みやすく、また、子どもたちの姿や教師の思いが表現できている「本づくり」をねらったのである。なぜならば、学校として、或いは教職員集団の総体として、如何に学校の外に向かって「地域に開かれた魅力ある学校」づくりを提示していくかが要請されているかは言うに及ばず、組織の力の結集としての教職員の意識の高揚が欠かせないものであったからである。その意味で、かなり相互研修的な創り上げの営みであった。

今日子どもたちの教育に携わるためには、教師自らが教職の仕事に対して、使命感を持ち、自分なりの教育の理念を持ち、一人一人の子どもに関わっていく心構えが大切である。その意味するところは、教職歴の経験の多少で問題が生じるということではなく、若い教師は若いなりに自らの持ち合わせている力の限りを語り、また経験豊富な教師は経験に

^{*1} 東京工芸大学工学部基礎教育研究センター非常勤講師
2008年9月19日 受理

^{*2} 東京工芸大学工学部基礎教育研究センター教授

裏打ちされた指導技術を発揮すればよいということである。

学校の教育活動は、一人一人の教師の力で学習指導や児童生徒指導や学校行事等が意図的計画的に行われ、子どもたちの学級・学校生活が成り立っている。つまり、小学校の教師の場合には、学級担任として教科指導や学級活動等をほぼ一人で行っており、一日のほとんどの学校生活を子どもたちと接しているのである。だからこそ、教師の日常的な言動からあらゆる生活態度に亘る領野を子どもたちは見ながらそれから影響を受けて、そして成長していくことを自覚する必要がある。

それ故に、これから教職として小中学校及び高校の教師を目指そうとしているもの、及び既に教職に就き具体的に教育活動に従事している若い教師たちに伝えたいこととして、極めて限定した範囲内ではあるが、ここに小論文をまとめる。

1 自らの教師像を持って臨むということ

教師の求められる資質能力については、社会状況や子どもの変化を踏まえつつ、学校や教師に対する期待の高まりや学校教育における課題の多様化・複雑化する中で、繰り返し論議されてきている。その中で、中央審議会答申「新しい時代の義務教育を創造する」(2005〈平成17〉年10月)では、次のような「あるべき教師像」として三つの重要なポイントを明示している。

①教職に対する強い情熱

教師の仕事に対する使命感や誇り、子どもに対する愛情や責任感など。また、教師は、変化の著しい社会や学校、子どもたちに適切に対応するため、常に学び続ける向上心を持つことも大切である、と。

②教育の専門家としての確かな力量

教師の力量は、子ども理解力、児童・生徒指導力、集団指導の力、学級作りの力、学習指導・授業作りの力、教材解釈の力などからなるものと言える、と。

③総合的な人間力

教師には、子どもたちの人格形成に関わる者として、豊かな人間性や社会性、常識と教養、礼儀作法をはじめ対人関係能力、コミュニケーション能力などの人格的資質を備えていることが求められる。

また、教師は、他の教師や事務職員、栄養職員など、教職員全体と同僚として協力していくことが大切である、と。

教師であるからには「あるべき教師像」は、重要な課題として把握されるものである。と同時に、一教師自らの「めざす教師像」を描くことも併せて努力する必要がある。若い教師は勿論のこと、経験ある教師においても、自らの「めざす教師像」を目標に子どもたちの前に立つことが大切である。

筆者がここで強調したいことは、この「めざす教師像」を教育活動の日常化の中において具現化していくのであるが、子どもたちと共に過ごす教育の営みの過程において「教職の楽しさ」としてこれを表現することが重要であるということである。教師は、日々の教育の営みの中で、子どもたちに向かって教師の人格そのものにおいて相対し、時には教師の人生を語る時もあるからである。その表現について具体的にあげるならば、次のようなことである。

○教師の指導者としての基本姿勢の中には、子どもとともに学び成長しようとする意欲的な教育態度とその実行力が必要である。

○清新な若さと澁刺とした言葉で語り、ひたむきな誠実さで子どもたちに対すれば、信頼感は自ずと高まる。

○教師の新鮮な驚きと豊かな感受性を発揮しつつ、教師自らの表現力を磨く努力を怠らない。

教師にとって「教職の楽しさ」を見出す術は、教師自らがつかみ取るものであるし、初めて教壇に立った時より実践の積み重ねで徐々に獲得していける可能性がある。

2 子どもにとって学校は楽しいところ

さて、前章を踏まえるならば要点は、子どもにとって学校は楽しいところであるかどうかである。学級担任として、学級の子どもたちが毎日楽しい期待感を持って登校しているか、また、今日一日を満足して下校しているか、ということが教師からすると重要な観点なのである。子どもにとっての学校生活の満足度を、教師は知っておく必要がある。ここで想定される満足の範囲を掲げるならば、まずは授業がわかった、夢中になって遊べた、プールに入って

楽しく泳げた、給食がとても美味しかった、遠足が楽しかった、先生と相談できた、大好きな友だちと話せた、等々である。そしてさらに楽しい理由は次々と続く。そしてこれらを客観的に整理して考えてみると、しっかり学べたり新たな知識を獲得したりみんなの前で話せたことが自信や充実感となり、それによる満足感や達成感、安心感や信頼感が成就されるということだ。一日の学校生活の中には満足に繋がる数多くの契機や成果が存在しているはずである。そして、子どもたち一人一人に応じてこの楽しさが獲得できているかどうかは、教師のアンテナを余程高く掲げていないとその実現は難しい。

しかし、ここでいう楽しさとは、自らの思い通りの満足感、自由気ままな充足感だけではなく、学校という教育の営みの中で捉える独自の「楽しさ」として教師は理解していなければならない側面がある。もしかしたら、楽しいという表現は相応しくないかもしれない。それは何か。教育の中には当然ながら満たされない・受容されない出来事や考え方に遭遇する場面も必ずある、ということである。子どもにとっては、時には不満や失敗が起こり、戸惑いで立ち止まることもあるはずだし、緊張感や嫌悪感を体験する場面もあるはずである。また、時には友だちとの対立や軋轢から困惑し苦悩する経験もあるはずであるし、これらは教育の営みとしては必要不可欠なものだと考えられる。この克服においての「楽しさ」もあるのだ。

3 教室環境づくりと学級経営

教師は学級を担任した場合、学級経営として、子どもたちによる学級内の合意形成づくりを重視した話し合い活動や学級内のルールづくりを重視した活動、人間関係を形成する力を養う活動などに取り組むことになる。

子どもたちの学校生活全体の中で、ここでは子どもの〈居場所〉としての教育環境を如何に創り出していくか、そしてそのための教師の役割とは何かについて述べていく。今日においては、子どもたちには安心して安全な生活を送ることができる学校が、まず第一の条件と言える。安心して学校生活を過ごす基盤は学級にある。そこでの生活環境がしっかりと整備され安定していることが大事である。学級は

まず居心地が良くて、学校生活を送る安定感が欠かせないし、とにかく雰囲気良くて元気がある、或いは何事にも努力を惜しまない力がある、問題やミスを解決していく力がある等々、学級の底力のある集団形成の力が育つ必要がある。第二の条件には、楽しい学級、学校の条件が備わっているということである。つまり、学級の出来事の中にいつも活力があり笑いが絶えない、そして穏やかで親切的なルールが定着しているということである。そしてまた、時にははずこけて楽しい、日替わりメニューで話題のヒーローが生まれるという現象も出現するということである。みんなで汗をかき燃えることが好きな学級こそ、楽しい学校の条件といえるのではないだろうか。学級担任の努力次第では、学級の色は如何ようにも形作られるのであるし、学級担任の人柄、人格的な魅力、持ち味等が発揮されて学級の雰囲気が醸し出されてくるはずである。したがって、学級経営は、この教育環境づくりと深くかかわっている。

子どもが気づくか気付かないかを問わず、学び育ち成長していくためには、家庭や地域の教育環境と学校全体の教育環境の充実が重要である。そして、ここで言えることはとりわけ学級内の教育環境づくりについて最大限の努力を惜しまないことである。

まず、教室には当然のこととして、数多くの教育備品や教材等が設置され、それらが物的環境を形づくっている。黒板、オルガン、事務机、書架、テレビ、児童机と椅子、ロッカー、窓にカーテン、掃除ロッカーにゴミ箱、そして、掲示板等々。これらを大切に使い扱い、整理整頓していくことは、学級担任の基本的な職務の一つである。まずは、教師自身が率先垂範して、子どもたちに対して一つ一つ取り扱いや利用方法を示すところから始めないといけない。特に、教卓と事務机の上やその中は、小綺麗に保つことで、先生は綺麗好きでしっかりしているなという印象を子どもに伝えることになる。清掃時に「しっかり掃除しなさい。」という依頼という名の指導では駄目である。黒板やゴミ箱などは、完璧に近いくらいの綺麗さは保ち続けたいものである。授業時間には欠かせない黒板の扱いは、子どもたちに大きな影響力を与えるものである。ましてや、板書文字は丁寧に書き綴るようにし、時には色チョークも活用し、落書き黒板にならないような普段か

らの環境づくりに気配りする必要がある。

また、学級では特に掲示物全てについて、どの壁面にどのような掲示物を貼り出していくかが重要なポイントである。学校目標や学級目標は、常套の定番として教室正面中央に掲示するとしても、子どもたちの作品をどのように見やすく鑑賞しやすい観点で掲示するかがより重要である。教室内や廊下掲示であっても、無造作に羅列的に貼り出しただけでは意味をなさない。一定の期間を限って学級内の子どもたちの作品を順に掲示するか、或いは意図的に観賞を踏まえた掲示を心掛けることが必要である。

さらには学級活動に関してであるが、子どもたちのよりよい学校生活を築くためには、集団としての活動を指導していくことが大事である。そのための学級会の係活動は特に重要である。学級内の決められた掲示コーナーに、活発な活動の動きが明確に見える取り組みは指導次第で可能である。

以上からして言えることは、環境づくりとは、「何(what)」を「どのように(how)」創造するかは教師の教育的意図や願いと相関しているということである。また、子ども達一人ひとりの「個のレベル」への教育的配慮と学級・学校という「集団のレベル」への教育的意図は常に相関しているということである。そして、教師力の1つは、学級経営の力として見出されると言えよう。

4 教師のコミュニケーション能力は教育環境の一つ

学校の中での子どもたちを取り巻く人的環境としては、まずは子どもたちと子どもたちの関係からはじまって、子どもたちと教科担任との関係、そして、子どもたちと学級担任との関係が中心である。また、授業の支援者やボランティアで関わる人たちも加えられるし、学級担任が出張で不在の時、補填で指導していただく先生も考えると、子どもたちに関わる人たちは限りなく多い。今日の学校の指導体制としては、子どもたち一人一人を支援するという児童指導や教育相談体制を確立しようとしていると言える。そして少人数指導や個別支援体制というシステムの取り組みが積極的に行われているので、子どもたちがより多くの教師に関わることは大事

な視点なのである。

これについて更に詳しく検討してみよう。教科担任や学習支援者、朝読書のボランティアの指導者が教室で子どもたちに関わる時、そのような機会が予定されている場合、学級担任としては事前指導をどのように行い、どの程度のシミュレーションを描いておくかということが重要である。なぜなら、例えば翌日の朝読書で誰が訪れるかという予告をしながら、お招きする最低の教室環境としては、子どもたちが迎える心構えや終えた後の感謝の姿勢は自然の流れとして活動できるような計画的指導は、子どもの発達段階に応じて欠かせないからである。また、出張で留守をした翌朝は、まず一番に補填に入っていた先生にはお礼を述べるとともに、子どもたちの様子について確認しておく必要がある。そして、始業時に学級の子どもたちに対面した時、開口一番、昨日の子どもたちのがんばりについて補填の先生からお褒めの言葉をいただいた報告を兼ねて、子どもたちにほめ言葉を投げかけてあげることが大切である。少々委細なことだが、こういう一つひとつの手間暇をかけた価値づけによって学級の力が育っていく要素がある、ということである。

学級担任と子どもとの関係の在り方は一番重要な場面である。教室は学校生活を主に過ごす子どもの社会ともいえる場所であり、その中で、人間関係やコミュニケーション能力等を形成し十分なトレーニングが経験できなければならない。教師とは例えば、子どもたちの間で起きるどんなトラブルにも手を抜かず、公平に親身になって関わるのが大事である。学級内にトラブルによるしこりを残すことは良くないし、固定グループの争いが起きることも良くない。そのためには、日々の指導の中で子どもたちの輪の中に入っていき努力は怠ってはならない。グループダイナミックスの理解が大切である。

以上からして、教師のコミュニケーション能力は教職に欠かせない資質の一つである理由がこの辺にあると思われる。

5 教師力を築きあげるもの

教師は常に自らのモチベーション(動機づけ)を高めるために努力する必要がある。例えば、朝の通勤途上や校門をくぐり職員室へ出勤した場合、今日

の一日をどういう心構えで過ごすかを自らに言い聞かせるようなトレーニングを試みることも大事である。それは、自らの教育姿勢を確かなものに育てていくための日々の教育課題に後ずさりしないという積極的・能動的な自らのモチベーションアップのために、最適ではなかろうか。

子どもにとっての楽しい学校・楽しい学級は教師自らによる楽しさのメッセージが発信されなければ成立しない。まだ経験が少ないからとか、教育技術が伴わないからと萎縮していくのではなく、若い教師は若いからこそ清らかな子どもと共に学ぶ姿勢があれば、必ず子どもとの関係性は築くことができるものである。遠い将来に向けての教師像を創り上げるというよりは、若い教師の創る「めざす教師像」を目標にし、今ある若い教師の力を発揮してこそ、子どもたちはその魅力に惹かれていくものである。若くて経験の浅い教師は、今現在持ち合わせている「優しさ・ユーモア・誠実さ・熱中さ」等々、自らの「持ち味」を知って大いにそれらを駆使し自信を深めることを奨励したい。

さらには、教師の日常的な言葉遣いや衣服の着こなしも重要なポイントである。子どもたちは、教師の一挙一動を鋭い目で見抜こうとしているはずである。先生は言葉遣いが荒いとか、センスが良くないというふうに敏感な感覚でチェックしているし、いわゆる評価をしているのである。日々の授業の中で語り続ける言葉や態度そのもの、子どもへの声のかけ方等々、何気ない仕草や癖までも教師は発信しているものと認識しておく必要がある。子どもたちからの信頼感を積み上げるか否かは、日頃からの何気ない教師の生活態度の中にあると思われる。しかし、教師としてはそれらに臆せず、自らをよく見つめて自らの人間性を表現していく冷静さは保たなければならない。「めざす教師像」は、ここに生きている。

教師力を形成するにあたって求められる次の事柄には、児童生徒指導上の課題がある。いじめや不登校、万引きや怠学等々、子どもに降りかかった問題行動については、教師による思いこみや早合点は避けなければならない。早い解決をはやるあまりに決めてかかるような指導展開は禁物である。まずは冷静に状況把握に努めて、柔軟な姿勢で言い分や訴えを聞き分ける傾聴の姿勢は大前提である。間違い

や不注意は正し、学級のルールや規律性は大事にしていくという考えを貫き、正義が尊重されるというメッセージを発信することが大事である。

1章から本章までの以上の考察から、教師に求められる資質能力についてここで再び要約すると、まず第一に教職に対する情熱や教師の使命感は必須条件である。第二には、子どもに対する興味・関心、子どもにどう関わるかという責任感を持ち合わせる。第三には、人としての社会性、つまり対人間関係能力を持ち合わせつつそれに磨きを掛ける努力が重要である。第四には、コミュニケーション能力に磨きをかけるためには、広い視野と柔軟な心と確かな知性を求め続けること。第五には、教師にも表現力が欠かせないということ。これは指導技術に合わせて、教師による「朗読・作文・演劇・合唱・絵画・体育」等々、自らの持ち味を生かせる芸術表現等を力強く発揮したい。第六には、連絡調整・協力連携を図り、ネットワークが組める能力も必要である。第七には、教師の資質能力の最後として、学校教育から地域社会への関心と社会参加活動から培われる「教師の社会力」が、特に重要となるであろう。

6 おわりに

―教師の絵心は心と心をつなぐ―

筆者は、今年の春135名の卒業生の似顔絵を描き上げ、卒業を前に6年生の卒業生に饞(はなむけ)のプレゼントとした。あらかじめ4人の学級担任に相談を持ちかけ、昨年の12月から実行に移し、毎日3名を描き上げる計画で、朝の行間時に1名、給食時に2名を校長室に招きながら、子どもたちとふれあい似顔絵描きが実現した。小中学校及び高等学校においても、卒業式という儀式的行事は学校教育では特別な意義をもつ。子どもたちや保護者をはじめ教職員や地域の方々にとっても、子どもたちの成長の節目を祝う感動的な行事である。学校の教育課程では、特別活動の儀式的行事に位置づけられて、学校生活に有意義な変化や折り目を付け、厳粛で清らかな気分を味わい、新しい生活の展開への動機付けとなるような活動を行うこと、と規定している。似顔絵描きの取り組みは、実行に踏み切るまでの「果

たして似せる顔が描けるか」という不安感と焦りは、子どもたちと対面しながら作品が仕上がり始めるにつれ、全くの杞憂に終わったのである。当初の想像以上に、子どもたちの喜びは大きく、保護者からも熱く感謝の思いが伝わってきたからである。

一組から順に始めて、徐々に次の学級へ話題が広まるとうわさも手伝い、「すげえ、似てるぞ」とか、「人の似顔絵見たいな」といって校長室を訪れる子どもたちが増え始めた。

子どもと対面している時間はおよそ20分間という限られた時間の中で、緊張感とともに互いに見つめ合う時間から似顔絵は生まれた。子どもとの会話を楽しみながら鉛筆を走らせ、仕上がった直後の笑顔はどの子たちも素敵であった。

似顔絵描きという行為については、教師の仕事である児童生徒理解に通じる重要な要素を含んでいると考えられる。児童生徒理解は、学校生活のあらゆる場面で努力していくわけであるが、児童生徒により近い場面設定の中で、子どもと教師が積極的に対峙し、互いに見つめ合う機会は、日々の教育活動ではなかなか設定しにくいものである。一人一人の子どもの目を見つめて、心と心が向き合うようなあらたまった時間を共有することは、教育活動では貴重な時間である。子どもと教師の心と心がふれあう、向き合う中から心をさらけ出していくような静の時間が流れていく場づくりは、敢えて創り出す必要があるのではないだろうか。その意味でこれは、教育の効果が期待できることが実感できた体験であった。好きこそものの上手なり、という諺があるように、若き教師たちも児童生徒理解のために試してみる価値があるのではないだろうか。

冒頭で紹介したN小学校研究実践記録集「百合の樹の下で」から、巻頭の言葉を紹介すると、以下の通りである；

学校の百合の樹が一番華やぐ季節は、やはり春である。八重や鳶尾の山並みが萌黄色から新緑に移る頃、百合の樹の花が開き始める。ちょうどチューリップに似て愛らしく、直径五、六cmの薄い橙色の縞模様をした特徴を持ち、無数に咲き乱れる。また、若葉に身をまとして、堂々と樹勢を誇る姿は、誰からも親しまれ愛されている。そんな百合の樹の下で、Nっ子はよく遊ぶ。朝の始業前や中休み、昼休みや放課後に、校庭を所狭しと群れ遊ぶ。先生たちも一

緒に遊ぶ。百合の樹の大樹は、生き生きと輝き遊ぶNっ子に優しく微笑みかけて、また枝を大きく伸ばす。そして、子どもたちは、友だちと楽しく関わり合い、自己の思いが表現でき、生き生きとした子どもたちに成長していく。

百合の樹は、四季折々の姿を魅せて、日々の教育の営みを見つめる。それは、Nっ子と先生たちの真剣な授業風景であったり、学校行事にいい汗かいた時であったり、おはようという、元気な朝のあいさつができた時であったり、子どもたちが力一杯自分を表現している時であったり、それはみんな百合の樹の下の子どもたちの輝きである。

教育の営みとは、子どもたちと先生による、日々繰り返し営まれる教育活動そのものである。春の学校開き・学級の出会いは始まり、各学期毎に計画された数々のステージ上で子どもたちは活躍し、大きく成長する。子どもたちの確かな学びや豊かな体験を、先生たちとの関わりや友だちとの関わりで「仲間づくり」を学んで、やがて一年間の時間が経過し、閉幕を迎える。正に、春から夏へ、夏から秋を経て、冬を迎える「N小学校物語」ともいえる。成長と感動の場面が繰り返されるのである。この「百合の樹の下で」は、本校全教職員による一人一原稿を目安とした、N小の教育で子どもたちと「関わる喜び」と「その熱い思い」を書き綴ったものである。一人一人の教職員が、日々の教育の営みの中で、「授業づくりや仲間づくり」を実践し感じてきたありのままの記録である。一冊の研究実践記録として、何とかまとめ上げるまでへこたれず努力してきた全教職員と研究推進委員並びに編集委員に感謝である。

～略～

参考文献

- 1) 「百合の樹の下で～生き生きとした子どもが育つ学校～」愛川町立中津小学校研究実践記録集
- 2) 齋藤孝「教育力」岩波新書、2007
- 3) 門脇厚司「子どもの社会力」岩波新書、1999
- 4) 河合隼雄「子どもと学校」岩波新書、1992
- 5) 石村卓也「教職論～これから求められる教員の資質能力～」昭和堂、2008
- 6) 改訂「小学校学習指導要領」文部科学省

補章一 技術的熟達者と反省的实践家

教師の専門的力量とは何かについては様々な考え方がある。それらのうちの一つに、D. ショーン (Schön) や J. ブルーナー (Bruner) らの考察を踏まえながら佐藤学が提示したものがある。即ち、「技術的熟達者 (technical expert)」と「反省的实践家 (reflective practioner)」という2つの系譜の教師の専門職性へのアプローチの仕方を提示している。まずは前者は、「技術的实践」(technical practice)として、後者は「反省的实践」(reflective practice)として捉える。前者は、専門性の基礎を専門領域の科学的な知識と技術の成熟度に置く。専門的力量を専門的知識と科学的な原理と技術で規定するのである。一方後者の専門性は、複雑な文脈で複合的な問題の解決を遂行する文化的・社会的実践の領域として捉える。専門的力量をいわば省察 (内的な反省) と熟考の力量で規定するのである。また実践的認識との関わりでは、前者が複雑な状況や事柄を可能な限り単純に明示できる概念や原理に一般化することによって「確実性」を拡大するのに対して、後者は単純な状況における多義的な意味の複雑さや豊かさを解明して「不確実性」の世界に足を踏み入れるのである。探究と表現に関しては、前者は「パラダイム」の様式をとり第三人称・非人称の文体で客観的記述をし、後者は「語り」の様式をとり主観性を尊重し一人称の文体で記述する。したがって、前者は客観的な厳密性と科学性を志向して個別の状況を超えた普遍的で原理的な理解を求めるのに対して、後者は状況に対して柔軟で繊細になれる個別的で具体的な認識を追究していくのである。¹⁾

この二つの視点から教師の専門性を検討してみると、学校教育の実践に長年に亘って関わってきた教師の先の提言は、臨床的に分析された教職の専門性についてかなり共有され得る一般性を提示されていると考えられる。そしてこの提示が2つのアプローチのいずれかに与するとはなかなか断定できない専門性である。むしろ2つが交錯していると、改めて認識させられる。

佐藤学は、先に紹介した2つのアプローチについて、両者の間に優劣をつけて決着するというより、教師の専門的力量は「アポリア」としての性質を含

みながらも教師の実践において、文化的、社会的、政治的、倫理実践の複合体として専門性が展開されていると解釈している。²⁾

つまり、教師達は諸実践において理論的な概念や原理を実践の文脈に対応させて翻案するのだが、それは単純な「理論の実践化」ではないということだ。教師一人ひとりの独自の文脈に翻案して、子供理解を深めたり、教材研究の再考をしたり、授業を再組織したりと多様な創出がある。そしてその再構成をする教師の専門的力量は2つのアプローチの単純な合一においてはではないのである。この再構成をなし得る教師の独自の「熟考」には、教職が複雑性を有しており、単純な論理の再帰性・再現性を持ち得ないという特性を見出せる。したがって、先に提示された教育論は、それぞれが個々の固有な文脈に即して改めてその都度に翻案し再構成することが要請されている。その際に、学校における教師の同僚性 (collegiality) が背面で支え促す。³⁾ 長きに亘る教師の実践を経て示された先の提案には、この同僚性のもつ実践創造への諸契機が窺われる。専門家として成長し合う教師同士の連帯と研修は大切な沃野であると思われる。

注

- 1) 佐藤学「教師というアポリア」世織書房、1997、p. p. 57-60 参照
- 2) 同上書、p. p. 64-65 参照
- 3) 佐藤学「教育方法学」岩波書店、1998、p. 144

付記：「はじめに」から「おわりに」までは小島が、「補章」は滝沢が分担執筆した。